

表紙地図紹介 『大熊本市全図』1947年（昭和22）

前回の第5号では1937年（昭和12）の「最新熊本市街地図」で戦前の熊本市の様子を紹介しました。今回は昭和22年に発行されたと記録されている「大熊本市全図」で終戦後の熊本市の様子を紹介します。

熊本地域は、昭和14年に清水村、昭和15年に日吉村、力合村、川尻町が合併して更に拡大しています。戦前に置かれていた陸軍の施設は、学校や住宅となっていることが読み取ることができます。

熊本城内を見ると、現在の藤崎台球場の場所にあった熊本第一陸軍病院が厚生省に移管され、国立熊本病院となっています。その上の三ノ丸付近に「国立玉名病院」とあるのは、戦中、現在の玉名市にあった熊本第二陸軍病院を、戦後に城内に移して改称、診療を継続していた施設です。二ノ丸広場の場所に「医大」の文字が見えますが、本荘町の熊本医科大学（現在の熊本大学医学部）が空襲で大部分を焼失したことから、二ノ丸に不要となっていた旧陸軍予備士官学校校舎を仮住まいとして移転してきています。また、「九品寺」の文字の左に見える「体質研究所」（現在の熊本大学発生医学研究所）にもその機能を分散しました。

この地図には学校を示す「文」と学校名を多く見ることができます。昭和22年の3月には教育基本法と同時に学校教育法が公布され、6・3・3・4制の新学制が発足しています。義務教育が9年間となり、すべての国民に基礎的な普通教育を施す体制がとられました。熊本市は、昭和20年7月と8月の空襲により市街地の約30%が焼け野原と化し、市立の学校も国民学校4校、中等学校2校、幼稚園1園が全焼し、国民学校の3校の一部が焼失しましたが、小学校は

関係者らの努力により、この頃には徐々に校舎が再建し始めていました。

中学校は新学制により、熊本市内は出水、白川、慶徳（のち藤園）、花陵、力合（のち城南）、京陵、西山、江南、龍南中学校の9校が、昭和22年4月22日に一斉に開校式を挙げました。しかし、突如生まれた新制中学のため、発足にあたっては学校施設の整備と教職員の確保が深刻な課題となっていました。開校式は、西山中を除き、小学校の講堂を借りたり、校庭で行われました。校庭といっても、食糧増産の畑が残っており、校舎もほとんどが小学校や旧制中等学校の間借り、あるいは旧兵舎を教室に転用していました。また校長は教員探しに走りまわりました。なお、新制中学の発足と同時に、熊本市内の私立旧制中等学校7校（鎮西学園、九州学院、尚綱学園、九州女学院、家政女学園、信愛女学院、女子商業）にもそれぞれ新制中学が誕生しています。

また、熊本市は昭和21年から戦災復興土地区画整理事業を実施しました。道路や上下水道、公園といった都市施設や学校の配置計画が作られ、その後徐々に現代の熊本市の基盤が形作られていきますが、その形が地図に現れるのはもう少し後のこととなります。

【主要参考文献】
『新熊本市史』通史編第8巻、1997年
『熊本市戦災復興誌』1985年
『熊本大学六十年史』2014年

（研究員 長 和史）

開設2周年記念講演会のお知らせ 講師：谷口 博文氏（九州大学産学連携センター教授）

【演題】地域を担う人材育成と地域の自立 ～パブリックガバナンス改革～

自治体消滅の危機がリアルに語られる今日、東京一極集中の社会を地域拠点都市中心の構造に変えなければ、日本は生き残れません。そのための政策形成過程は、中央から地方へ、役所から現場へ、そして中央依存から自己決定へ変わらざるをえないのです。それができるかどうかは、地域自身のガバナンス改革とそれを支える人材力にかかっています。人材育成の新たな取り組みを紹介し、地域の自立を考えます。



日時：平成26年11月5日（水）午後3時～（2時間程度）

場所：熊本市国際交流会館7階ホール

定員：200名（先着順、参加費無料）

講演につづいて、谷口博文教授、幸山政史熊本市長、蓑茂壽太郎都市政策研究所長による鼎談を行います。

テーマ「持続可能で創造的な都市づくりと人材育成」

※お申込みはひごまるコールまで（096-334-1500 / higomaru-call.jp）



熊本市都市政策研究所ニューズレター 第6号 2014年（平成26年）10月

【編集・発行】熊本市都市政策研究所

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1-1 熊本市役所本庁舎13階 ☎096-328-2784

宝くじの収益金は公共事業等を通じて社会に貢献しています。

E-mail: toshiseisakukenkyusho@city.kumamoto.lg.jp

ホームページはこちら

熊本市都市政策研究所

検索

IPRK

Institute of Policy Research, Kumamoto city

熊本市都市政策研究所ニューズレター 第6号 2014年（平成26年）



昭和22年『大熊本市全図』（個人所蔵） ※原本の地図に、一部施設名を加筆しております。

〈第9回講演会報告〉

「地域愛を育むプロセス —まちづくり・地域活性化原論として—」
東京農工大学名誉教授 千賀 裕太郎 氏

〈研究コラム〉「リノベーションとコンバージョンによるまちづくり」
「現代につながる近世熊本のまちづくり思想」

活動報告

表紙地図紹介

開設2周年記念
講演会のお知らせ

第9回講演会報告（要旨）

■第9回講演会

期日 平成26年8月12日

場所 熊本市国際交流会館7階ホール

「地域愛を育むプロセス

ーまちづくり・地域活性化原論としてー」

講師：千賀 裕太郎氏

（東京農工大学名誉教授）



スミレやレンゲが咲き、さらさらとした流れの中で泳ぐメダカ・・・唱歌「春の小川」には緩やかに流れる農業用水路が描写され、日本の国土づくりの原理が歌いこまれている。急勾配の河川から水を引き緩やかな水路を張り巡らし水田や溜め池を作り、また森林の管理によってミネラルや有機質の豊富な土壌が作られ、こうして豊かな国土が作られてきた。人の手で維持し、

※講演会要旨の文責は、ニューズレター事務局にあります。内容の詳細は、都市政策研究所ホームページに掲載しています。

多くの生き物が生を営む里山、水路、雑木林等の二次的自然は、人と生き物の信頼関係で作られたものであり、子どもはそこで自然と接触しながら、友達とともにすくすくと育ってきた。

ある研究によると、地域の人達が非常に豊かな環境体験をしているとすれば、豊かな地域づくりにつながるという傾向が明らかにされた。具体的には、環境体験の豊かな人が多かったある地域では、水路にふたをして集落の道路を広げようという議論があったが、水路で遊んだ経験を持ち、その場所に意義を感じる住民たちによって中止された、という事例がある。

また、海外ではオオカミに育てられた野生児の発見によって、人間は乳幼児の生育環境に大きな影響を受ける動物だということが示された。その意味では子ども人間性、感性や社会力をどのように創り出すかは非常に大事なことになる。

子どもが地域愛を育むうえで、特に注目されるべきは子どもの遊びである。子どもによる他者との相互交流である遊びには遊ぶ時間、遊ぶ仲間、遊ぶ空間という3つの「間」が重要であるが、現代ではこれが本当に少なくなってきている。今後豊かなまちづくりを考えていく上でも、子ども達の遊ぶ条件としての3つの「間」を十分に確保することが重要である。



■都市政策研究所活動報告 - 都市政策研究所研究報告会 -

都市政策研究所では、8月8日・19日の2日間にわたって平成25年度の研究成果について報告会を開催しました。

当研究所では、本市の中長期的なまちづくり構想に資する調査研究活動を行っているところであり、この度、直接市職員に平成25年度の研究成果を報告し、意見交換を行う場を設けました。2日間で約50名の参加者があり、各研究分野において活発な質疑応答と意見交換を行うことができました。

研究報告のテーマは下記のとおりですが、詳細については当研究所が8月に発行した都市政策研究所年報「熊本都市政策vol.2(2013)」に掲載しています。当研究所ホームページでも公開していますので、是非ご一読ください。

【研究報告テーマ】※報告順

- 久保由美子 「城下町・熊本の街区要素の一考察」
- 植木 英貴 「熊本市の人口動態の分析及び福岡市との比較考察」
- 堀 満 「熊本市における公共交通と特定公共施設分布の関係分析に基づく都市形成の考察」
- 武村 勝寛 「ソーシャル・キャピタルの今日的意義と都市政策への応用可能性」
- 渡辺 亨 「地域共有財の保全活動における民間企業と行政の連携 -熊本地域の地下水保全事業の事例から-」
- 長 和史 「熊本市の都市緑化政策の評価と課題」

リノベーションと コンバージョンによるまちづくり

現在、全国で空き家が約820万戸、熊本市でも約5万戸あるとされています（総務省『住宅・土地統計調査（平成25年速報値）』）。また、熊本市中心部商店街において、通りに面した1階部分だけでも7.8%が空き店舗で、過去10年間この数値は増加傾向にあります（熊本市『平成25年度商店街空き店舗調査結果』）。空き家、空き店舗の問題は今後少子高齢化・人口減少社会を迎え、ますます深刻化すると思われます。

空き家、空き店舗の問題は民間企業や建物のオーナーに限った問題ではなく、近年では地域コミュニティの課題として捉えられています。「空洞化」によって地域の活力を損ない、地域住民の生活を支える買い物機能が弱体化する、空き家や空き店舗（ビル）が犯罪を誘発する恐れがあるから人が近寄らない、などの負の連鎖を招くためです。

この課題に対して、「リノベーションとコンバージョン」が注目されています。リノベーションとコンバージョンは芸術家、建築家等の広義のクリエイターを都市に引き寄せ、彼らのもつ創造性を、都市の経済発展と地域コミュニティの課題の解決に活用するものです。リノベーションとは古い建物を建て替えるのではなく、建物のもつ動きや機能を更新することであり、場合によっては建物の用途の転換（コンバージョン）を促します。例えば、長年空き家状態の古い民家をリノベーションし、カフェを開店するといったことが当てはまります（下の写真）。ここは現在、「まちの中庭」としてコンバージョンされたことで、多様な人々の交流の拠点となり、文化を発信する場となっています。

クリエイターによるリノベーションやコンバージョンは、空き家、空き店舗を減少させることで、物件の価格、地価・路線価といった経済的価値の向上と、防犯や買い物弱者への対応等の地域コミュニティの課題に対応するものです。その結果都市の魅力を上向きさせると期待されています。加えてリノベーションやコンバージョンは、建物とそこでの生活者、そして地域の歴史を継承するものでもあります。これは熊本市が取組んでいる、都市に固有の自然・文化・歴史といった資源を活かす「都市の再デザイン」という考え方を、まちなかで実践するものでもあります。

（研究員 草野 泰宏）

【北九州市小倉北区のリノベーション事例】



【左】ビル間のリノベーション物件入口

【上】ビル間のリノベーション物件

現代につながる 近世熊本のまちづくり思想

熊本の景観構造に今なお深く息づいているもの、それは熊本城と城下町建設当時のいわば「まちづくり」思想です。

築城術には、方角信仰を重視する風水の考え方をうけて、地域の有力な神社や仏閣を結ぶ線上天守を置いたり、逆に天守の位置を決めてから重要な方角に寺社を置く手法がありました。熊本城大天守の場合、吉祥の方角である乾巽（いぬいたつみ）（西北-東南）のうち、加藤清正の死後、乾の方角に菩提寺である本妙寺が、鬼門・裏鬼門にあたる艮坤（うしとらひつじさる）（東北-西南）には、細川時代にそれぞれ泰勝寺、妙解寺が建立されました。では天守の位置がまず決まっていたのでしょうか。実は、残る巽方角（東南）に逆の可能性が隠されているのです。歴史を遡って律令制の時代、全国各地に「国府」と、仏教による鎮護国家のための国分寺および国分尼寺が設けられました。肥後では、現在の水前寺・国府・出水の一带にあり、この地域は近世の加藤・細川氏の時代に至るまで「熊本府の談義所」として重視されました。国分尼寺は平安末期に焼失、その後再建されませんでした。現在の水前寺成趣園の辺りにあったと考えられています。また肥後

鎮守の宮で西暦935年勧請（かんじょう）と伝わる旧藤崎八幡宮（現在の藤崎台県営野球場）は、熊本城大天守の酉（とり）の方角（西）に立地しています。つまり、国分尼寺跡を巽方角に、藤崎宮を酉の方角にとった交差点に、大天守が築かれているのです。したがって、神社・仏閣の位置から天守の建設地点が決まった可能性も考えられるのです。

地理的に見れば、城下町とその背後の山々に旧国府の水郷域を含めることで、風水思想において吉地とされた「背山臨水（はいざんりんすい）」の理想的な構図が成立します。また軍事的には、坪井川と井芹川は熊本城の備えの第一線であり、白川が第二線、そして加勢川と緑川が第三線として想定されていたといわれています。これらの河川は、防衛面はもちろん治水の面でも重要であり、加藤清正はこうした様々な側面を配慮して、城下町建設や各種の土木事業に着手したと考えられます。

風水思想に結びついた当時の都市計画は、一見、前近代的にも思えます。しかし、地域の歴史や地理、防衛防災を総合的に捉えるその考え方は、一方で日本列島の豊かな自然を享受し、他方でそれがもたらす災害を幾度も乗り越えてきた日本人の「自然とのともいき（共生）」の有りように似つかわしいといえます。とりわけ清正公以来のまちづくりを営々と受け継ぐ熊本市民にとって、彼の雄大なまちづくり構想は再評価されてしかるべきでしょう。

（研究員 久保 由美子）

